

あいのて

平成25年7月1日発行

発行：京築教育事務所

人権・同和教育室
(TEL：0979-83-3602)

タイトル「あいのて」は、がんばっている人には絶妙のタイミングで“合いの手”を入れる、困った人には“愛の手”を差し伸べることができる、そんな人権・同和教育室でありたいと願ってネーミングしました。

はじめに

6月14日（金）に平成25年度校長・人権教育担当者等合同研修会がおこなわれました。受付・駐車場業務、閉会後の後片付けまで、参加者の皆様にご協力いただき、ありがとうございました。今年度は、毎年行っていました講話に、説明と実践報告を加えた内容とさせていただきます。実践報告いただきました蓼島小学校にあわせてお礼申し上げます。

大阪教育大学 園田雅春特任教授のご講話からは、人権が尊重される学校づくりを推進する上でのご示唆をいただきました。参加者の皆様方からも、「人権感覚のアンテナを高くしていきたい」「共感することの大切さがわかりました」「もっと聞きたい」等の声を多く頂きました。

そこで、今回の“あいのて”で、園田先生のご講話の内容を紹介することにしました。

また、最終ページには、授業で身につけたい「授業コミュニケーション力」についての連載をしています。今回は「話す」についてです。是非、ご一読ください。

園田先生からは90分のご講話をいただきました。すべての内容は紹介できませんが、抜粋したものを紹介します。



平成25年度校長・人権教育担当者等合同研修会（平成25年6月14日）

講話「これからの人権・同和教育の実践～キーワードは『自尊感情』～」

大阪教育大学特任教授 園田 雅春

あれっ?!が人権感覚のスタート ～「黒いランドセル」から学ぶこと～

小学校に、あるひとりの女の子が入学しました。彼女は背中に黒いランドセルを背負って、毎日、通学を始めました。しかし、教室に行っては「男みたい」とからかわれ、学校の行き帰りには他学年からも中傷を受けます。

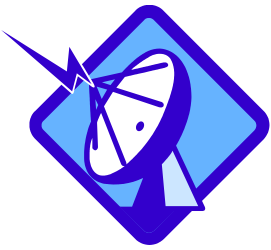
女の子は、家に帰って相談します。家の人も学校に相談しました。担任は1年生の教室で子どもたちに精一杯説明をしますが、なかなかうまくいかない。その子はとうとう転校することになりました。

転校先の学校でも、同じように彼女は背中に黒いランドセルを背負って登校しました。彼女のランドセルの色を見て、誰よりも真っ先に「あれっ?」と思った担任は、その日のうちに保護者の家を訪ね、気になっていた「ランドセル」のことをたずねました。「きっと、訳があるんだと思います。よかったら、黒いランドセルの訳を教えてください」と。家の方は、黒いランドセルを開きながら、そのわけを語ってくれました。

彼女には、3歳上のお兄ちゃんがありました。お兄ちゃんは小学校に入学しますが、実際にランドセルを背負って学校に行けたのはわずか、2回。すでに小児がんにも冒されていたお兄ちゃんは、3回目のランドセルを背負うことなく、この世を去ってしまいました。3年後、妹が大きくなって入学。周りから「新しいランドセルを買おうよ」とすすめられますが、「お兄ちゃんのこのランドセルを背負って学校へ行く、大好きなお兄ちゃんと一緒に学校に行く」と妹は強く望み、周囲もそれならば・・・と見守っていたのでした。

黒いランドセルのむこうにこのような背景・ドラマが隠れていたのです。このことがわかったのも、担任の「あれっ?」という気づきと、実際に家庭訪問し当事者の思いをまず知ろうという意識があったからです。





担任は、この話を聞くと「明日、子どもたちにどう伝えよう」と考え、またこのことを学校に持ち帰り、同僚に伝えました。返ってきた言葉は・・・「すごい話を聞いてきたね。これは貴重な学習材じゃないか。学校をあげてこのことにつながる取組をしよう」ということになり、各学級で実践に取り組みました。保護者も胸をなで下ろし、彼女もお兄ちゃんと気持ちよく学校へ行けるようになりました。

このように一人一人の先生に人権感覚アンテナがたっていて、同時に学校組織としての人権ネットワークが張りめぐらされていることが大切です。「自分が大切にされている」と一人ひとりの子どもに実感させること、このことが人権教育の根幹です。

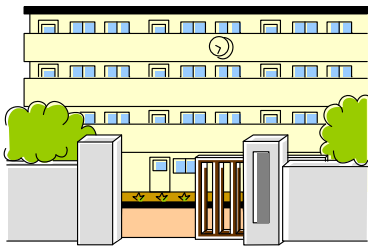
「自分が大事にされている」という実感から始まる人権感覚

人権教育には、①「人権についての教育」と②「人権としての教育」があります。

①は見えるカリキュラムであるのに対し、②は自分が大事にされていると実感できる教育のことで、見えないカリキュラム（隠れたカリキュラム）です。

人権教育をより充実するためには、この二つの教育のバランスがとても大切で、この二つが縦系と横系のように編み込まれていくことが大切です。

自分が大切にされているかぎり、その気持ちは相手にも伝えたくなり、自分が大事であると同時に、ほかの人も大事だという感情がこみ上げてきます。「あなたが大事なんよ」というメッセージをもらった本人は、「自分って見捨てたもんじゃなかった、自分ってこんなに見てくれている人がいる、このように評価してくれている人がいる、だから・・・」と結果として自尊感情が大きく育まれていきます。そのようなメッセージをもらった本人は、次に「このように、自分を大事に思ってくれている人がいる、その人を恨むわけにはいかない、泣かすわけにはいかない、裏切るわけにはいかない、その人を大事にしなくっちゃ・・・」と思うようになります。



100を超える「教育のひきだし」あり!!

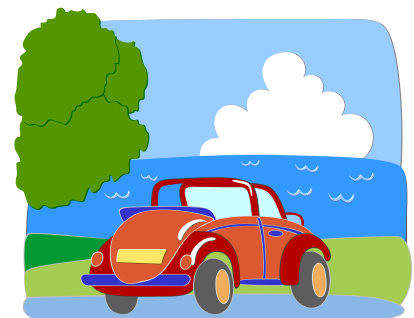
今日、日本で「〇〇教育」と呼ばれているものは、100を超えるといわれています。その一つ一つの教育がひきだしなのですが、人権教育というのはそれらの教育の中の一つのひきだしとしてではなく、すべての教育・ひきだしの底板・基盤になるものです。数学の授業の最中も、体育の授業の最中も、休み時間も、給食時間も、人権・同和教育は底板として位置付けていなければすべてがずたずたになってしまいます。

学びのシャッターを開くための自尊感情

自尊感情とは、たんに英語が出来る、数学の点数がいいといったような単なる自信ではなく、自分の存在そのもの（生）を基本的に肯定していることです。この対極の感情が「どうせおれなんか・・・」「しょせん、私なんか」「もう、おわってるし・・・」という感覚です。「もう終わってるし・・・」というのは、もう、すでに心や学びのシャッターを下ろして生きている子どもたちです。心も学びのシャッターも閉じている者には、あらゆる倫理も道徳もむなしなものでもしかありません。では、どうしたらいいのでしょうか。それは、自分ってそうじゃなかったんだと、シャッターを上げてもらうような感情との再度の出会いが欠かせません。

ほめることより、まずは共感を!!

♪ココロも満タンに♪〇〇石油・・・のCMのように、だれもが心の中が満たされたいものです。それには、ほめることも大切ですが、ほめるより前に、まずは共感すること。「この子って、こんなに優しいやん。思わず、共感!」「この子ってとってもがんばってるやん、思わず共感!」そして、その後、感じたことをナチュラルな言葉でありのまま伝えます。結果として、「あ、今、ほめられた」「自分は認められた」と子どもたちが感じる大切が大切です。



「いいとこ探し」だけからの脱却を!

だれしも、長所もあれば、短所もありますよ。その秀でている長所を取り上げ、「いいとこ探し」をし、他者からのプラスメッセージによって、自尊感情はますます育まれるということで、友だちの「いいとこ探し」が小学校を中心に流行しています。ですが、人は凸ばかりではありません。かならず凹のへこんだ部分を持って生きています。先ほどの心のシャッターを下ろしている子どもは、自分のここが凹んでいるからということから、自分のことが好きになれない、自分の存在そのものに対してシャッターを下ろしています。だからこそ、私たちは大人として、教育のプロとして「とんでもない、すごいやん!」と凹んだ部分に肯定的・共感的・支持的なプラスのメッセージを送りたいものです。

「〇〇力」をつけたいなら、「〇〇欲」を

自尊感情が豊かな子どもは、人権感覚も豊かになると同時に学力も向上すると言います。なぜなら、学欲が明らかに高まるからです。同様にコミュニケーション力を高めるには、コミュニケーション欲をいかに高めるかということがキーポイントとなります。このような、〇〇欲という意欲を高めるためには、あの子どもみたいになりたいなあ・・・といったモデルの存在が鍵となります。そして、そのようなモデルが集団の中に存在しうるかどうかは、個人個人の持ち味が自由に発揮できる雰囲気があるかどうか、「おまえやったら大丈夫や」と互いの個性や思いを支える開かれた集団になっているかどうかにかかっています。



とある日の「学級新聞」に

とある学校のA先生は、毎日、学級新聞を出していました。発行第29号の新聞のトップ記事は、「女子ウザイ、死ンデほシイ」という一人の子どもが殴り書きした言葉でした。A先生は毎日、授業の終わりに紙を配り、子どもたちはその紙に、今日一日最もうとうとうしかったこと、あるいは感動したことを殴り書きします。先生は、その日に回収し職員室で見ます。その中に、この走り書き、殴り書きがあったのです。A先生は、その殴り書きを学級新聞のトップ記事にし、その後、先生のコメントを載せました。「つらい文章だ。いったい何があったのか」と。つまり、聞かせてよ、

聞かせろよという思いで生徒の気持ちを受け止めています。一方的に突き放しません。その次に「でも、軽々しく『死ぬ』という言葉を出してほしくないなあ。人間の命はかけがえのないものだ」と続けます。最初に受容しますが、受容しっぱなしではありません。ちゃんと要求もしています。この受容と要求はいわばセットであり、二つのバランスがとても大切です。

自尊感情という名のガソリン

どの子どもも、みんなブレーキも、ハンドルも、アクセルも同じように持っています。では、何が違うのか。それは、自尊感情というガソリンです。一人ひとりに自尊感情というガソリンを満たしていきたいものです。



♪ココロも
満タンに

人権教育関係研修会等日程(7月以降)

●京築教育事務所人権・同和教育室主管研修会

●県人権教育研修会

平成25年 8月1日 (木)	10:00 ～ 12:00	校長人権教育研修会	京築教育事務所
平成25年 8月2日 (金)	10:00 ～ 12:00	教頭人権教育研修会	京築教育事務所
平成25年 12月4日 (水)	13:50 ～ 16:40	人権教育担当者等 研修会	京築教育事務所

平成25年 7月26日(金)	第1回福岡県人権教育研修会 (人権尊重精神の育成) ※1名以上参加	福岡 市民会館
平成25年 8月23日(金)	第2回福岡県人権教育研修会 (進路と学力の保障1) ※1名以上参加	福岡 市民会館
平成25年 11月8日(金)	第2回福岡県人権教育研修会 (進路と学力の保障2) ※1名以上参加	行橋市立 今元中学校
平成26年 2月25日(火)	第3回福岡県人権教育研修会 (社会教育) ※希望参加	社会教育総 合センター

～ある青年の小学校低学年時の体験から～

ある授業の時、紙粘土でものをつくるとき、ぼくは城をつくろうとがんばっていた。できあがったのを見た友だちに「城に見えへん」と言われ、ショックを受けた。そんな時、担任の先生が自分の作品を手にとって「すごいね、これ。君の考えている世界が小さくなって表れたね」と言ってくれた。あまり、うまく城を表現できていなかったけれど、担任の先生は、ぼくの個性から生まれた、ぼくの世界だと認めてくれた。

～人はただ自分が愛する人からだけ、学ぶものである～
ゲテ

このコーナーでは「きく・みる・話す」について考えていきたいと
思います。「きく」「みる」「話す」は、人間の言語活動の中で最も
基本的なコミュニケーションです。しかし、ちょっと教師が意識を変
えるだけで子どもに変化が表れるのです。第2回では「きく」について
紹介しました。今回は「話す」について紹介します。

話す

左の漫画を見てください。子どもたちが教師の話を理解しておらず、
うまく動いていない状況です。何が良くなかったのか考えてみましょ
う。子どもの聞き取る力を考えず、「機関銃発言」をしていたからで
す。ここで教師が怒るのもおかしな話です。

達人は「話す」ときに「他者への意識」と「サービス精神」をとて
も大事にしています。つまり、いかにわかりやすく伝えられるか、が
大きなポイントとなってきます。達人のワザをいくつか紹介しましょ
う。まず子どもに「よし、今から聞くぞ」と思わせるスイッチを作る
ことです。そのスイッチを押してから、クエスチョン（発問）または
トーキング（会話）すると効果的です。

【スイッチ】

人の子どもを「きく」モードに切り替えるためのスイッチにも、
様々なものがあります。いくつか紹介しましょう。

手の合図……手をあげたらこちらを向く、拍手をしたら集まる。
などの合図を決めておく。主に体育など、屋外での活
動に効果的。

ボソリ……「今から大切なことを言います」と投げかけ、わざと
小声でボソリ。子どもが「えっ、なにに？」と集中
してから改めて一番のキーワードを伝える。
クラス全体がザワザワしているときに効果的。

ホメホメ……「〇〇さんのきき方、とてもいいですね」「□□さん
は大きな耳になっていますね。ダンボのようです」と
きく姿勢をほめる。低学年には効果的。

びっくり……「あっ！！……と驚くような話をしましょう。」
など、わざと語頭を大きな声で発言する。
子どもがびっくりして顔をあげてから話を続ける。
クラスがだらっとしているときに効果的。

スイッチ……本当の電気のスイッチのこと。電気が消えたら活動を
やめて教師の方を向く。主に音楽や造形活動など。
大きな音が出ている活動の時は視覚的に気付けるので、
たまにやるなら効果的。ただし常時は薦められない。

【トーキング】

子どもとの会話や対話をするときは、次の四つのポイントを意識してみましょ
う。きっと子どもの動き方に
変化がみられます。

ボリューム………声の大小に気をつける。その場に応じたボリューム調節が重要です。

アップダウン………抑揚をつける。声の大きさがちょうど良くても、淡々と話をすれば子どもも大人も眠く
なります。ドレミファソラシドを意識して発音してみましょ

ボディランゲージ……身振り手振りをつけて話す。教師は劇団員！少々大げさなくらいが丁度いいかもしれま
せん。

グースイッチ………具体的に、数でポイントを示しながら、一文で簡潔に話をしましょ
う。
具体的な「グ」数の「ス」、一文の「イッチ」略して「グースイッチ」と覚えましょ
う。
上の漫画では、これができていませんでした。

